

安曇野市文書館の特色

平沢 重人

開館からの5年を振り返った時、何よりもありがたかったのは、長野県内に、市町村立文書館の仲間（現在7館）がいることである。開館に向けての準備はもとより、2年目の全史料協（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会）全国（安曇野）大会の開催、日々の業務である資料の受入れや整理、職員の研修について等多くの助言をいただいた。その中で当館は育ち、少しずつ市民への認知度もあがり、現在がある。

当館の実績や沿革については、24ページからの「安曇野市文書館の概要」で確認してほしい。この章では、当館の特色ある取組について記したい。

1 人物顕彰

当館が収集する「歴史的若しくは文化的価値を有する公文書等」（安曇野市文書館条例第1条）の中に地域資料がある。個人や法人、団体等が所有してきた資料である。地域が歩んできた歴史や文化を知ることができる貴重な資料であり、2023（令和5）年12月末現在263の資料群を有する。その中で当館の特徴となっている資料が、安曇野市にゆかりのある先人たちの顕彰資料である。安曇野市ホームページには、258人が紹介されているが、当館には13人3,555点の資料が収蔵されている。その内訳（五十音順）は、会田血涙1,085点、青木祥二郎8点、飯沼正明35点、井口喜源治35点、上原良司103点、臼井吉見383点、清澤冽114点、杉山巢雲12点、多田加助3点、千国安之輔74点、藤森桂谷1,375点、松澤求策281点、務台理作47点である。

その中から企画展や講演で取り上げた人物について、経年で紹介したい。



安曇野市ホームページ

(1) 人物顕彰と文書館（2018年）

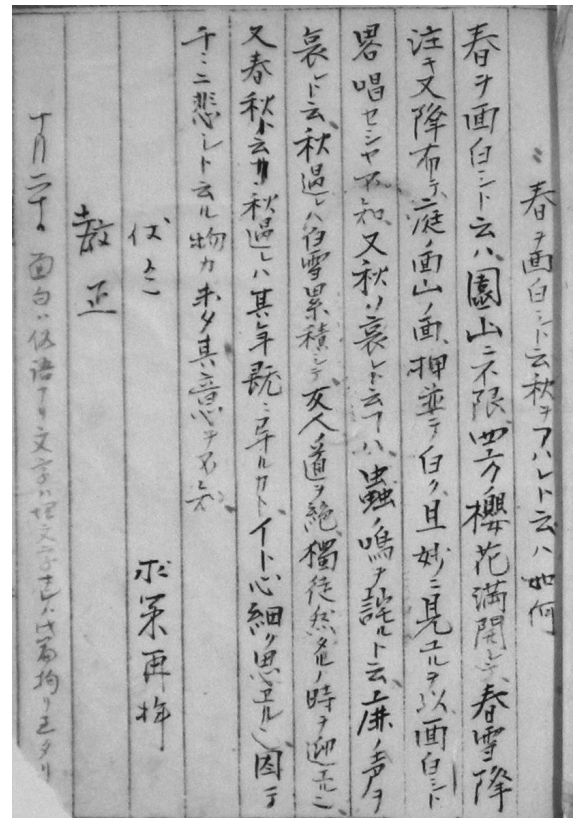
2018（平成30）年9月30日（土）は、小松芳郎氏（松本市文書館特別専門員）による文書館開館記念イベント講演会の予定であった。当日は、台風24号到来により10月1日（日）の開館記念行事と併せて中止となり、講演会は12月2日（日）に改めて開催された。開館記念講演会の演題は、「人物顕彰と文書館」である。題目に「人物顕彰」の文言を取り上げているところからも、人物に関わる資料に対する当館の位置づけが明らかである。小松氏は、歴史を彩った郷土の人々として10人を取り上げた。詳しくは、当館閲覧コーナーの「安曇野市文書館講演会資料」を閲覧してほしい。

(2) 松澤求策（2018年）

当館に収蔵されている「松澤求策関係資料」は、市指定文化財に登録されている。開館記念企画とし

て松澤求策を取り上げた趣旨は「明治になり、日本は近代国家の道を歩み始めた。その歩みの中で私たちの郷土、安曇野の先人である“松澤求策”は『自由民権運動のリーダー』と呼ばれている。求策の足跡を求策本人や彼と繋がる人たちの記した文書を通して探る。」である。松澤の生い立ちや国会開設に向けた取組などを当館閲覧コーナーと隣接の堀金総合支所2階の交流ラウンジを利用して開催した。

2018（平成30）年11月18日（日）第1回文書館講座として「武居用拙塾に入塾しよう」を企画した。松澤が持つ文章力や表現力、時代を多角的・多面的にみる力は、彼が20歳の時に武居用拙から学んだ経験によるところが大きい。武居は、1871（明治3）年に藤森桂谷が人材育成のために法蔵寺境内に開いた私塾 猶興義塾の塾長として木曾から招かれた人物である。その塾の授業を疑似体験する講座である。講師は、中島博昭氏（郷土史家）、伊藤信一氏（長野県立歴史館資料調査員）、平沢重人（安曇野市文書館館長）、逸見大悟（教育委員会文化課主査）の4人である。松澤が塾で学んだ自筆の記録集「作文草稿集」を4グループで読み合い、松澤の学びに触れた。



松澤求策関係資料24-4 「作文草稿集」

（3）安曇野文化人の系譜（2019年）

2019（令和元）年9月29日（日）、赤羽康男氏（市民タイムス特別編集委員）を講師に、「安曇野文化人の系譜～あなたが案内人～」と題した講演会を企画した。「安曇野市の変遷を探る～あづみの？あづみの？安曇野～」企画展の関連講演会である。知名度の高い「安曇野」がどのように形成されたかを、現在に至るまでの歴史的経過や関係する人物像を中心に、文書館が所蔵する資料を紹介しながらの講演であった。参加者から「臼井吉見、荻原礫山、熊井啓に共通する生き方を知ることができた。安曇野の景観のすばらしさが文化人を生む土壌となった。歴史と文化、景観を誇りとして観光や産業に活かすべきという話に共感した。安曇野の個々の事象は知っているが、歴史や時代の中でそれぞれが繋がっていることが今回の話で理解できた。」という感想を得た。

（4）清澤洌（2021年）

令和3年度前期企画展として「多元主義社会を生きる～自由主義擁護の旗手清澤洌の思想を通して～」を開催した。日本が国家主義に圧倒されていた時代に生きた清澤洌が、世界情勢を分析した多数の評論や書籍、自らの戦争体験を「戦争日記（暗黒日記）」として記した清澤の生涯を紹介することにより、グローバリズムとナショナリズムがしのぎを削りあっている現代における私たちのあり方を考えることができた。

2021（令和3）年5月23日（日）、上條宏之氏（信州大学名誉教授、長野県短期大学名誉教授）を講師に「『暗黒日記』を読み解く～アメリカ留学で自由主義者となった清澤洌『戦争日記』考（試論）～」と題した講座を開催した。①清澤洌のアメリカ観、②「戦争日記」にみる清澤の戦争観、③「戦争日記」

にみる清澤の民衆観、という3つの項を立て、記述の背景を解説しながら読み解く内容であった。清澤と出身地である安曇野との関りについての解釈は興味深いものがあった。上條氏が用意した20ページに及ぶ配布資料は、当館で閲覧できる。

また、2021（令和3）年6月13日（日）には、「戦争という非常時に生きた清澤冽の覚悟～グローバルリズムとナショナリズムの狭間に生きる私たちへの提言～」と題したシンポジウムを開催した。第1部は、井上亮氏（日本経済新聞社編集局編集委員）による「右でも左でもない『自由』の人」と題した基調講演である。第2部は、井上亮氏、江川紹子氏（ジャーナリスト）、渡辺知弘氏（信濃毎日新聞松本本社報道部記者）、中川遙哉氏（信州大学政治参加推進コミュニティ「Voters」大学1年生）のパネリスト4人によるパネルディスカッションである。趣旨は、「戦争という非常時に生きたジャーナリストである郷土の先人、清澤冽の姿に学びながら、私たちが直面している非常時（新型コロナウイルス感染症への対応、多様な考え方や生き方についての議論、自国の安全保障と経済を守るための他国との距離感など）の中で、自分なりの考え方や生き方を問う機会とする。」である。清澤の「正しいとは、相手の考えも常に尊重して考慮に入れて発言する人が正しい」という考え方に共感する参加者が多かった。課題は、参加者のほとんどが60歳以上であるということである。若い世代に清澤を含め、ゆかりの人物について注目してほしいが、若い世代にとって先人の生き方は、無意味なのか。若い世代との意思相通について検討していく必要がある。



(5) 会田^{けつるい}血涙（2021年）

会田^{けつるい}血涙は、本名を^{みつぐ}貢という。1926（大正15）年から1954（昭和29）年にまで発行された月刊誌『信濃不二』の編集者及び出版者である。『信濃不二』は、南安曇郡誌や豊科町誌の近代編に引用されてきた地域資料であり、近代の安曇野の生活や文化、社会情勢を知る貴重な資料である。2021（令和3）年7月18日（日）、平沢重人（安曇野市文書館館長）を講師に「近代のジャーナリスト 会田^{けつるい}血涙」の講座を開催した。2021（令和3）年3月に会田の遺族から寄託を受けた雑誌『信濃不二』全462点を紹介しながらの講座である。当館には、更に「会田^{けつるい}血涙資料」625点が収蔵されている。その中には、『帝国及び列国の陸軍』（陸軍省）、『満洲信濃村建設概要』（長野県学務部）等、日本が太平洋戦争に向かった当時に発刊された書籍や刊行物534点が含まれている。

(6) 上原^{うえはらりょうじ}良司（2022年）

上原良司は、有明村（現安曇野市穂高有明）の「有明医院」を引き継ぎ、村助役としても活躍した上原寅太郎の三男として生まれた。上原が注目を浴びるきっかけとなったのは『きけわだつみのこえ』（岩波文庫・1982年）である。巻頭に上原の「遺書」が掲載された。穂高町の時代から上原の顕彰活動は行われている。2022（令和4）年は、上原の生誕100年であることと、上原が学徒生として入隊し80年にあたるため企画展を開催した。

2022（令和4）年10月23日（日）、都倉武之氏（慶應義塾大学福澤研究センター准教授）を講師に「上

原良春・龍男・良司三兄弟の資料を通して見る戦時下の『自我』と題した講演会を開催した。上原家では、太平洋戦争で三兄弟を亡くしている。慶應義塾福澤研究センターでは、上原家に残る1万点近くの資料の整理研究を進めてきた。その研究を通して、感じていることを「おわりに」の場面で語った部分を紹介する。

「戦争体験を継承し、無数の死を後世にどう生かしていくと言われて久しいわけですが、戦争というものはいけない、人の命が、尊い命が奪われる、そういう戦争はあるべきではないということは恐らく誰もが肯んじることだと思います。しかし、時には必要だとか或いは正しい戦争があるんだとか、それぞれの人間の事情によって今なお戦争が繰り返されているのが改めて皆さんに申し上げることでなく、日々のニュースを見ていれば分かることです。戦争とはこういうものだからということを通認識として持つことはなかなか難しい。けれども上原家の資料を見ていくことによって、人間というのは上原良司のように素晴らしい人がいて、彼の言っていることを後世に伝え、それによって戦争を問うていく。それはそれで非常に大事なことです。彼だけが特別だったのか、特別な彼がほかにいなかったからあの戦争が起こってしまったのか。そうではない、ほかの人たちにも関心を向けて多様な個人が存在した、そしてその多様な個人の中にも戦争に対する様々な想いがあって、それを丁寧に想像していくことによって戦争を避ける道は、もしかしたら生まれてくるのではないかと考えています。戦争というものをこう捉えなければいけない、何か正しい答がある、それを後世に伝えていかなければいけないことではなく、この時代の人は何を考えたのだろうか、どうして戦争を避けられなかったのか、という答えのない問いを考え続ける模索こそが、継承として重要なことではないか。何か決まっている答えがあって、皆さんこれを将来に伝えていきましょう、ということではなくて、戦争はどうしたら無くなっていくのだろうか、どうして日本で戦争が起こってしまったのだろうか、そういうことを自分事として問い続けていく、模索していくことが、この戦争の時代に学ぶことの本当の姿勢なんじゃないか。戦争体験、資料の継承、何故資料を残していくのか、何故上原家のこの資料が大切なのか、そういったことの意義をまさに問い続けていくことが大切であり、この資料がそのことに直結する資料になりうるからだと考えています。」



2022（令和4）年11月20日（日）、「今、安曇野から平和を思う」をテーマとしたシンポジウムを開催した。大串潤児氏（信州大学人文学部教授）による「相手を理解すること～上原良司の思想を手がかりに～」と題した基調講演を経て、「次世代の日本・世界を生きていく若者が今、抱いている平和を維持し続けることへの疑問や不安について、パネラーを中心に討論し合うことを通して、今、私たちができることやすべきことを少しでも共通理解することができる。」を趣旨としたパネルディスカッションを開催した。パネリストは、大串潤児氏、矢野司氏（安曇野市教育委員会指導主事）、小澤すみれ氏（長野県豊科高校2年生）、足立翔氏（安曇野市立穂高西中学校3年生）、岩田さくら子氏（同）の5人である。話題となったことは、上原は、自由主義者であり、そのことがクローズアップされているが、等身大の彼は、恋もするし、悩みもあるし、酒も飲んだ。社会も同じでトータルでものごとを捉えたい。情

念、つまり素朴な感情でいえば、「どうして世界は仲よくできないのか」、そういう問いを常に持ち続けることも大事であり、他方で今、戦争を支えることが出来る社会が作られつつあるというそういう社会のあり方をきちんととらえる知性も必要であるということである。最後に大串氏が、「小澤さんは、『答えが出ない』と話してくれたけれど、出なくてOK。問題はそう簡単ではない。悩んで悩んで、考えていくことです。」と話した。10月23日（日）の講演会で都倉武之氏が「おわりに」で話した内容と同じものである。

2 学校資料

当館には、市教育委員会学校教育課から移管された学校資料がある。市域全体を網羅している学校資料を有していることは、当館の特色である。この詳細は、当館紀要第3号に詳しい。2019（令和元）年、移管初年度の点数は、1,651点であった。2022（令和4）年度末現在7,196点（小学校5,581点、中学校1,615点）であり、公文書全体の1割を占めている。この資料は、大学の研究者からの問い合わせ利用が多い。特に長期休業期間である8月及び3月に顕著である。

2019（令和元）年11月に「ザ！学校」と題した

文書館講座の開催を契機に、公民館や社会福祉協議会等の団体からの講演依頼も多く、学校資料が安曇野の近現代を知る貴重な資料として認知されてきている。また、安曇野市へ赴任した教職員の新任研修や市内教頭会の研修資料としても活用されている。



3 区有文書（区が所有している文書）

現在、市内には83の区があり、地域のコミュニティを形成している。各区には、公民館組織や、産土神と呼ばれる神社があり、地区行事や祭りが継承されている。そんな地域コミュニティが現在、転換期を迎えている。区への加入を望まない人の増加や役員のなり手不足、地区行事の精選などである。この変化は、2020（令和2）年に日本で初めて感染が確認された新型コロナウイルス感染症を契機に、顕著に表れてきた。この感染症が閉塞を迎え、以前の生活に戻った2023（令和5）年、各地区公民館からの出前講座で一番リクエストが多いメニューが映像資料「よみがえる安曇野」である。この資料は、2015（平成27）年、安曇野市市政施行10周年を記念して制作された映像フィルムである。昭和30年代から50年代までの各家庭や地域の行事を撮影したプライベートな生活が記録されている。今の時代につながる確かな地域のひと・もの・ことの記

区有文書に関する相談の受付について

◆安曇野市文書館では区有文書の調査を行っています。
安曇野市文書館では、市域に残る文書資料や写真、映像資料等を収集しています。区が保有している文書も、人々の歩みが分かる大変貴重な資料と考えており、現在、区有文書の調査を進めています。

このような資料がありましたら、文書館へお知らせください



- ・区の運営に関する「会議録」、「会計簿」、「日誌」
- ・青年会活動の記録
- ・地区公民館報
- ・育成会行事などの記録
- ・区独自で発行した冊子、記念誌
- ・写真、映像資料 …等



特に昭和20年代までの区の運営に関する決議録や会議録は、戦前・戦時下の市域の様子が分かる大変貴重な資料と考えます。このような資料がありましたら、ぜひご一報ください。
どの年代の資料でも、1点2点の資料でも結構です。また古い文書だけではなく、現在も発行している公民館報や冊子、記念誌なども収集しますので、ぜひ文書館へご寄贈ください。

◆区有文書に関する相談を受け付けています。

「古い資料が地区の施設にあり処分に困っている（捨てたい文書かどうかわからない）」、「どう整理すればいいかわからない」といった相談や「古い資料は文書館で引き取ってほしい」といった要望がある場合には、ぜひ御一報ください。職員が一度調査に伺い、御要望に応じて引き取りや管理に関するアドバイスをさせていただきます。

◆担当連絡先

安曇野市文書館
〒399-8211安曇野市堀金烏川12753番地1
TEL 0263-71-5123 FAX 0263-71-5127
E-mail bunshokan@city.azumino.nagano.jp
（開館時間：午前9時から午後5時、休館日：土曜日・祝日・年末年始）

録である。地域コミュニティのあり方について、課題意識を持っていることの表れのひとつと考える。

当館では、2021（令和3）年から区有文書の収集を呼びかけている。戦後、地域の社会教育活動の拠点となってきた公民館活動や地域コミュニティの推進役を果たしてきた区の記録である。また、寺社や水利、村会関係の資料など、近代の地域史を知る貴重な資料も含まれている。地域コミュニティのあり方が変容しようとしている現在、この資料を保存する意味は大きい。2023（令和5）年12月現在11区からの相談があり、そのうち6区（上鳥羽、等々力町、下長尾、七日市場、上堀、下堀）から寄贈、寄託されている。

〈寄贈・寄託された区有文書の分類と資料名について（一部）〉

- 社寺：社務日誌、祭典関係、寄附関係
- 財政：区費、耕地費、寄附、学校資金
- 水利：堰関係
- 会議：会議録（村会、区会）
- 郡政、町村政：開墾関係、農道関係、満州移民分村関係
- 軍事：銃後奉仕会関係、勤労奉仕計画、軍事郵便、入営関係、慰問関係
- 消防：ポンプ車両関係、夜警日誌、出初式関係、火の見櫓関係

令和5年度の文書館運営審議会において、「区有文書は、区民の財産である。寄贈・寄託してくれた区に対して、その資料を解説する場を設けたほうが良い」という提案があった。令和6年度、当館では区有文書に焦点を当てた企画展「今に繋ぎ伝えてきた区の実史」を開催する予定である。関連講座として、区役員と相談しながら区への出前講座として実施していきたい。この実績が、他区が持つ文書の当館への問い合わせにつながると考える。

4 他団体との連携

安曇野市は、設立の理念として「協働のまちづくり」をあげている。2014（平成26）年には、「安曇野市協働のまちづくり基本方針」を策定した。当館の運営もその延長線上にある。

（1）古文書勉強会

市内には、安曇野古文書勉強会（旧、穂高古文書勉強会）、三郷郷土研究会、下鳥羽の古文書を読む会、豊科郷土博物館友の会郷土史部など、古文書の調査や研究をしている団体がある。その会員の中から令和5年度11名を安曇野市誌編さん専門調査会（地域資料調査部会）委員に委嘱し、当館の運営に参加している。内容は、毎週金曜日の午後3時間、文書館収蔵の地域資料（古文書）の整理作業である。その成果として、現在200を超す文書群が整理され、目録化されている。委員からは、自分の読解力を高めることや郷土史研究に生かすことにつながると喜ばれている。

また、委員を講師とした古文書初級講座「ここから始める古文書解読『読んでみよう、くずし字』講座」（全5回）を2021（令和3）年から開設している。今年までに5回実施し、61人が受講している。受講された方からの感想を紹介する。



- ・展覧会に参加しても、今までは展示物をただ眺めてるだけだったが、読めるようになれば違う。
- ・絵画が好きなので美術館や博物館に行くが、「〇〇が送った書状」とあるが、有名人の文書があるんだと思うだけだったが、読めるとリアルさが違う。
- ・文字の成り立ち、くずし字はおもしろい。漢字そのものに興味がある。

終了した受講生の何人かは、学びをさらに深めたいとして、市内の古文書勉強会に参加している人もいます。各古文書勉強会が課題としていた「参加者のすそ野を広げたい」「次の世代を育てたい」の解決にもつながっている。

(2) 図書館

MLA連携という理念がある。Museum（博物館）、Library（図書館）、Archives（文書館）が連携し、相互の持ち味を生かしながら、資料の収集保存活用をするという考え方である。当市は、この3館が教育委員会文化課に属し、情報共有する連絡会も計画的に設定されている。地域資料の収集を進める中で、文書資料に合わせて書籍についての相談を受けることも多い。当館では、書籍の受入れは基本的には行っていないため、図書館への相談を仲介している。また、隣接している堀金図書館では、当館の企画展に関連した展示コーナーを設営している。さらに、当館の講演会には、「おでかけ図書館」ブースを会場に設営し、講演内容に関連した書籍の紹介や貸出を行っている。



また、隣接している堀金図書館では、当館の企画展に関連した展示コーナーを設営している。さらに、当館の講演会には、「おでかけ図書館」ブースを会場に設営し、講演内容に関連した書籍の紹介や貸出を行っている。

(3) 市内校長会、教頭会

令和4年度入学生より実施された「高等学校学習指導要領」地理歴史編に初めて「文書館」の文言が取り入れられた。当館では、令和4年度より中学校と高等学校との連携に取り組んでいる。この詳細は、当館紀要第4号に詳しい。

令和5年度は、コンパクト展示「文書館って何するところ？」を製作した。希望する学校での出前授業や校内展示に活用したい。

5 原課（担当課）との連携

文書館運営審議会委員から、資料の閲覧や問い合わせのデータを一般と市職員とで、分ける必要があるという提案を得た。市職員からの申請や問い合わせには、市民の声が内在しているからである。この提案を受け、企画展についても文書館独自で開催するのではなく、原課との連携を意識するようにした。

(1) 企画展

移管された公文書（非現用文書）に焦点を当てた企画展を開催している。その中で令和2年度企画展「五つの心をひとつに」、令和4年度企画展「安曇野市の災害～先人は何を考え、どう動いたか～」・「安曇野から平和を思う～上原良司生誕100年～」は、原課と連携して取り組んだ企画である。このことで

原課の取組を、企画展を通して、市民に周知することができた。また市職員も現在につながる行政のあゆみを理解することができた。

○「五つの心をひとつに」：地域づくり課

安曇野市市政の理念である「協働のまちづくり」に焦点を当てた企画展である。この理念は、令和5年度より実施の「第2次安曇野市総合計画 後期基本計画」でも継続されている。関連講演会や講座には、地域づくり課の職員も参加したり、地域おこし協力隊職員やインターンシップ生も参加したりと、職員研修の場としても活用することができた。

○「安曇野市の災害～先人は何を考え、どう動いたか～」：危機管理課

令和4年度は、市の組織の中で危機管理課が総務部から独立し、管理監が配置された年度である。また、消防団入団者の減少やポンプ操法大会のあり方などの課題解決に向けて検討している時期でもある。企画展では、災害（水害）に関わる現用文書を利用したり、消防団が有する資料を借用したりするなど、多くの方の協力を得て開催することができた企画展である。開催中、消防団員や市議会議員も多く来館し、当館への関心を広げることにつながった。

○「安曇野から平和を思う～上原良司生誕100年～」：総務課

令和4年度、本市が「安曇野市平和都市宣言」を制定し、10周年を迎えた。ロシアによるウクライナ侵攻に直面している市民にとって、平和に対する意識が揺れ動いている時でもあった。総務課は、「平和のつどい」・「広島平和記念式典参加」・「人権・平和特別授業 ～kizuki～」などの平和事業に取り組んでいる。これらは、2012（平成24）年12月に制定された「平和都市宣言」を具現化する取組である。2022（令和4）年11月20日に「今、安曇野から平和を思う」のシンポジウムを開催した。パネリストに中学生、高校生が含まれたこともあり、総務課職員以外に生徒や保護者、学校関係者などが来館し、参加者の幅を広げることができた。

（2）総務課

現用公文書を管理している部署は、総務課である。公文書の管理について、当館と総務課とは、常に連絡調整を行っている。当館開館の前年である2017（平成29）年9月に、安曇野市文書館業務検討委員会から提案された「安曇野市文書館開館に向けた提言書」を受け、安曇野市では3年ごとに公文書管理についての職員研修を行っている。公文書の流れ（整理、保存、移管又は廃棄）を作成する職員が認識することが大事であるということからである。令和2年度と令和5年度に「文書管理に関する意識調査」を各課の文書管理担当者を対象に実施した。調査項目の中から次の2点について考察する。

○「公文書の移管や廃棄を決定する作業を行っていて、不安を感じることはありますか」

	とても感じる	少し感じる	あまり感じない	全く感じない	わからない
令和2年度	22%	63%	0	15%	0%
令和5年度	18%	57%	22%	2%	2%

〈コメント〉

- ・移管及び廃棄基準はあるものの、基準に該当する文書なのか、判断が難しいものがある。
- ・確認不足などで、移管すべきものを廃棄してしまわないか、不安になることはある。課内で確認するが、分量が多いのでやや心配である。
- ・保存期間を満了しているが、残されている文書は、残された経緯などを知る職員もいないことがほとんどのため、選別に不安を感じるが多い。

- ・基準に則って作業をしている。不安な場合は問い合わせをしているので不安は感じない。

〈考察〉

文書管理担当職員にとって、当館を意識するのは、文書が保存年限に達し、評価選別を判断する時である。その職員が感じる不安が減少しているということは、文書館と業務を共有していることの表れととらえる。しかし、不安を感じている職員が7割を超えていることは課題である。

- 「文書作成時に当該文書が、将来文書館が所蔵する重要文書等となることを意識したことはありますか」

	意識したことがある	意識したことはない	わからない
令和2年度	56%	34%	10%
令和5年度	49%	49%	2%

〈コメント〉

- ・周年行事等、定例的ではない事業に関する文書を作成した場合などに、保存期間終了時に移管文書になる可能性があることを意識した。
- ・文書館を利用した際に意識した。
- ・日常の業務に追われ、そこまでは考えられない。
- ・後から重要となる文書もあると思うが、作成時に重要文書に該当すると判断できる文書も多くある。移管することを決めておいた方が、将来移管漏れを防げるのではないかと思う。

〈考察〉

現用文書であっても、市民から開示を求めれば、条例に則って対応することになる。全職員の調査ではなかったり、雑駁な質問であったりしたことを差し引いても、公文書管理に対する意識の低さは課題である。

2018（平成30）年、2021（令和3）年と3年ごとに実施された職員研修の講師は、早川和宏教授（東洋大学副学長）である。令和3年度は「公文書管理の考え方～面倒くさいからの脱却～」と題した研修であった。その要点を記す。

- ・2017（平成29）年に施行された「安曇野市自治基本条例」第1条に記されている「協働によるまちづくり」を推進するために、情報の共有なくしては協働なしである。参画の前提が知る権利であり、知る権利の前提が適切な文書管理である。
- ・「安曇野市自治基本条例」第21条に記されている「市政を市民に分かりやすく説明する」こと、第22条の「行政評価」の基礎が適切な文書管理である。
- ・公文書の移管や廃棄に対して、不安を感じている人が多いのは、健全な印象である。担当職員任せの判断になっていけば、不安を感じないほうがおかしい。
- ・「文書館に文書が保存されていてよかった」という経験は、公務員生活の中で数回かもしれない。しかしこの数回で節約できる時間は、膨大なものがある。消えた年金問題や森友問題に費やされた国家公務員の時間を想像してみしてほしい。

(3) 学校教育課

市職員と比較し、学校の教職員は、作成した文書が歴史的公文書となる、という意識は低い。安曇野市では、主な学校資料（日誌全般（学校日誌、当番日誌、保健日誌）、学校教育計画、諸会議記録、学校要覧、写真アルバム類、PTA関係資料、児童会生徒会関係資料、児童生徒作文（作文集・記録類））の保存年限を20年と設定している。20年を経た文書は、評価選別を経て、文書館に移管される。この移管事務を、教育委員会学校教育課が担っている。また、文書館では、移管された学校資料を活用した研修（新任教職員研修、教頭会研修）を実施している。この研修は、教職員の公文書への意識を高めることにつながっている。



(4) 地域づくり課

令和4年度、当館の利用者数（来館者及び電話やメールでの問い合わせ数）は、2,212人である。また、豊科駅でタクシーに文書館を指定しても、場所を知らないドライバーが多いというのが、現在の当館が置かれている現状である。当市では、地域づくり課が主催している「協働のまちづくり出前講座」を行っている。新型コロナウイルス感染症が第5類に移行された令和5年度、地域の公民館や社会福祉協議会からこの講座への問い合わせが多い。当館では、20講座の依頼を受けた。内容は、「よみがえる安曇野 I 集、II 集」（市政施行10周年記念アーカイブDVD）、「安曇野の災害」、「学校日誌から見る安曇野の近現代」、「安曇野の偉人から歴史を学ぶ 藤森桂谷」、「平和と幸福を追求した哲学者 務台理作」、「学徒出陣80年 上原良司の軌跡」である。各講座で、当館についての案内をしているが、認知度は低かった。講座の評価は地域づくり課が集約しているが、概ね好評である。この出前講座は、地域づくり課の実績にもなるが、当館の周知につながる取組である。

6 臼井吉見文学館の運営

平成31（令和元）年度より当館は、臼井吉見文学館（以下、文学館）の運営を行うことになった。平成30年度までは、「ほたるぶくろの会」が指定管理者として運営にあたっていた施設である。利用者にとって不利益が生じないように当館が進めてきたのは、指定管理者役員と臼井吉見文学館友の会役員との協議である。2018（平成30）年8月から2019（平成31）年3月まで4回の協議を行い、スムーズな引継ぎを行うことができた。

〈協議された内容〉

- ・白井吉見の顕彰をこれまでと同様に充実させていくことは、市の願いでもある。直営化された文学館と友の会との新しい関係を、双方の立場を尊重しながら構築する。
- ・友の会の活動については、会の自主性を尊重しながら、直営施設として入会手続きや行事の受付事務等は、会費を一時お預かりすることも含めて文書館としても協力する。
- ・講演会、れんげ忌等については、謝礼・旅費など文学館の予算の範囲において連携しながら推進する。ただし、れんげ忌については、祭礼に関わる行事なので、友の会主催とする。
- ・友の会の運営委員会への参加については、協働という考え方から館長が参加するが、役員でなく、オブザーバーという立場で参加する。

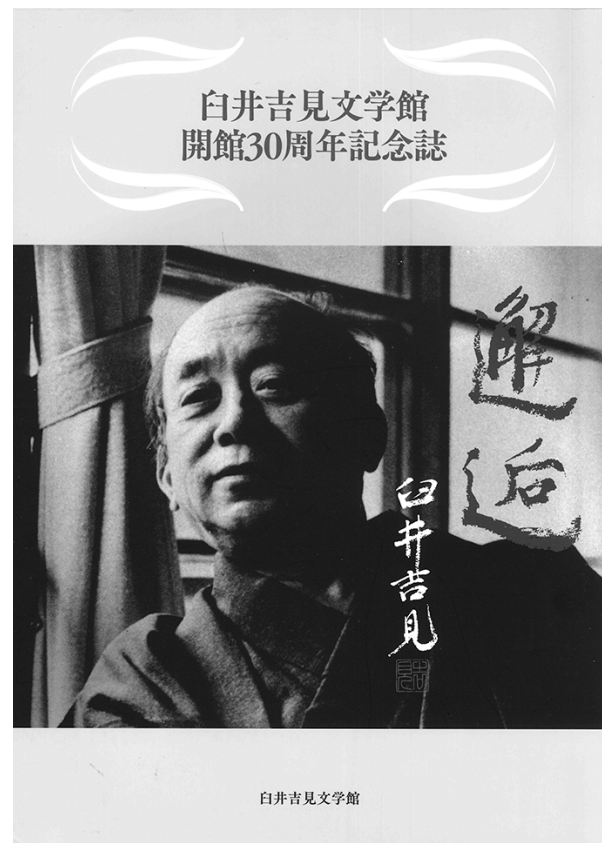
この5年間の運営の中で、特徴的な取組を紹介する。

(1) 白井吉見資料の保存・整理・活用

全国文学館協議会に参加しているが、近年の課題は、収蔵資料のデジタル化とWEB化である。文学館と文書館の運営が統合されたことにより、文学館に収蔵されていた資料のデジタル化を含め、整理や保存をスムーズに行うことにつながった。小説『安曇野』・『獅子座』の生原稿については、管理された文書館収蔵庫に保管することにより、今後の劣化を防ぐことができた。資料のWEB化については、文書館資料と同様に信州デジタルコモンズ・デジとしょ信州へ参加することにより解決していきたい。

(2) 開館30周年記念誌「邂逅」

令和3年度、文学館は、開館30周年を迎えた。友の会と協力して記念誌『白井吉見文学館開館30周年記念誌「邂逅」』を発刊した。地域資料調査部会調査員3人を委嘱し、資料調査も並行して行った。その中で、白井に関係する資料の寄贈や寄託について16件の問い合わせがあった。白井の二女増澤フユミさんから144点の白井吉見宛書簡や色紙などの寄贈を受けた。書簡については、公開には発信者の許諾が必要になるため、60人を超す関係者と連絡を取った。多くの著名人と親交を深めていた白井であることを改めて確認した。詳細については、目録を公開しているので、確認してほしい。本人や遺族のほとんどの方から承諾を得ることができた。白井直筆の色紙については、堀金地域の多くの家庭に所在していることがわかった。驚くことには、書かれている言葉が違っていることである。講演会を終えて、色紙へ一筆を頼まれること多い白井であるが、白井は、その場で書くことはせず、東京の自宅に持ち帰り、一枚一枚書いたとのことである。書かれている言葉に違いがある所以である。



この記念誌は、好評であったために、すでに在庫は無い。図書館で閲覧するか、白井吉見文学館ホームページにPDF版でアップしているので、ダウンロードしてほしい。

(3) 小説『安曇野』完結50周年記念企画

令和3年度の白井吉見文学館友の会加入者は115人、令和5年度は155人である。この増加の要因は、白井吉見の小説『安曇野』の脚光にある。2021（令和3）年に安曇野市市長に当選した太田市長が、小説『安曇野』の大河ドラマ化を選挙公約のひとつに掲げた。友の会としても、その後押しをしたいと考えた。2022（令和4）年、2023（令和5）年と文学館講演会や友の会主催の読書会などを通じて、友の会活動への参画を呼びかけた。2023（令和5）年12月には、市長に「小説『安曇野』復刊に関する要望書」を提出した。内容は、小説『安曇野』を原作としたNHK大河ドラマ化の実現に向けた取り組みを進めているが、小説は1974（昭和49）年に第五部が刊行されたが、既に絶版である。文学館の来館者の中には、「小説『安曇野』はどこに行けば買えますか?」と尋ねる方が何人もいる。是非、発行元である株式会社筑摩書房と小説の復刊に向けて協議していただきたい。というものである。文学館としては、生涯学習課の企画である「安曇野アカデミー」の令和5年度企画「長編大河小説『安曇野』」の2講座に協力した。また、2023（令和5）年10月には、政策経営課で大河ドラマ化に向けたパンフレットを作成した。マスコミへの露出が多くなったことが、友の会会員の増加につながったと考える。

2024（令和6）年は、小説『安曇野』が完結して50年である。文書館と文学館の合同企画として企画展「白井と紡ぐ」を計画している。白井は、「出会いと対話」を大切にした。小説『安曇野』に2,000人を超す人物を登場させ、その人物の対話によって、物語を展開させた。文書館が収蔵する資料にも同じことがいえる。市民の閲覧によって、その資料が生かされるのである。まさに市民と資料との対話である。哲学者クロウチェは、「すべての歴史は、現代史である。過去の歴史が、それ自身で一定の意味や価値を持っているのではなく、我々の住む現代との関連において、その意味や価値が定まってくる。」と『歴史の理論と歴史』（羽仁五郎訳、岩波文庫1952年）に記している。このクロウチェは、上原良司が恋人冷子さんに宛てたメッセージ（ラブレター）を記した書籍『クロウチェ』の著者である。

7 終わりに

当館の存在価値は、収蔵している「歴史的若しくは、文化的価値を有する公文書等」を通して、利用者が安曇野を知ることにつながることである。安曇野に関心を持つことにつながることである。安曇野を発展させることにつながることである。安曇野に当事者意識をもって主体的に生きる人を育てることにつながることである。最後に、2019（平成29）年9月、小松芳郎安曇野市文書館業務検討委員会座長から橋渡勝也教育長へ渡された「安曇野市文書館開館に向けた提言書」にある文書館の目的の4つの中から2つを記す。

- ・重要文書等を適切に保存し、公開することにより、市や市民の諸活動や歴史的事実を、現在及び将来の市民に対して説明する責任を果たすことが出来ます。
- ・重要文書等に加え、地域に残る歴史に関する情報も収集、保存、公開することで、市民一人一人が「先人たちが守り育てたかけがえのない自然、誇るべき郷土の歴史と文化を継承し、後世に伝える役割」（安曇野市自治基本条例前文）を果たし、教育、学術、文化、生活の向上を図ることが出来ます。